

言葉の嘘を感知し

「良き時」を共有する言葉を探す人

片桐ユズル詩集 『わたしたちが』

良い時をすごしていると』に寄せて

鈴木比佐雄

1

片桐ユズルさんと東日本大震災から三日後に京都で初めてお会いした。その時に最も感じたことは、このようなしなやかな自然体であり精神の自由な人間が現実存在するのだという不思議な驚きだった。片桐ユズルさんとの出会いは、札幌の詩人矢口以文さんが昨年にコールサック社から刊行した詩集『詩ではないかも知れないが、どうしても言っておきたいこと』をとっても高く評価してくれ多くの方に紹介してく

れたので、京都に行く機会がありお会いすることにした。片桐さんは私が出会った例えば浜田知章、鳴海英吉、木島始、嵯峨信之、宗左近といった大物詩人と同様のスケールと詩的精神の深みを感じた。しかしその誰とも違った異質な個性の輝きを放っていた。それは何かと問うてみると戦後詩の歴史の中で片桐ユズルという個性でしか切り拓けなかった領域があったのである、今もその可能性を生きているのだと思われるのだ。

片桐ユズルさんは、先祖が長野県下伊那郡根羽の出身で一九三一年に東京都杉並区に生まれた。父はクリスチャンで英国にも留学したことのある民間の英語教育者だった。祖母もクリスチャンだったと聞いているので、当時の一般の

家庭の仏教や神道の家庭とは全く異なる環境で育つたのだろう。片桐さんから直接聞いた話では、敬虔な祖母が信仰生活の実践者でその宗派の決まりごとで牛や豚の肉食などが禁じられていたため、ベジタリアンの暮らしだったそうだ。また土曜日の礼拝の際に外国人牧師の通訳を父がしていて、そのことで英語はあたりまえのものであったという。そんな話を聞きながら片桐さんの育つた環境は、日本でありながら外国のような異空間に日常的に出入りしているように感じられた。戦争中は学徒動員で真空管を作る工場で働いていたという。当時三鷹で暮らして

での日本は必ず勝つという言葉の中に、嘘の言葉を感じし違和感を抱いていた。勝つか負けるかを問われた時には「勝たねばならない」という苦肉の言葉でごまかし切り抜けねばならないことに、論理的な不誠実を感じていたそうだ。

いて東京大空襲の被災は免れたが、下町の東の空が燃え続けているのを今も覚えているという。戦争に勝ち目がなくなっただけで、学校や工場

戦後はラジオで進駐軍の英語を聞くようになり、早稲田大学文学部英文科に入り、詩作や詩誌作りを開始した。卒業後、寺山修司や白石かずこなどとも交流し、都立杉並高校の英語教師になった。その間に米国に留学し、英語教育にその成果を反映していったのだろう。先祖は信州の医師の家系だったという。しかし片桐さんはそのような日本的な伝統とはどこか吹っ切れている感じがするが、心身の関係をライフワークとしてきたことは、先祖の問題意識ともどこ

か重なっているのかも知れない。先程冒頭で名を挙げた詩人たちは故郷を抱えていて、その原点ともいえる故郷を決して忘れることなくその後の自分の仕事を発展させていった。ところが

片桐さんは祖母や父のキリスト教の影響からか原点が日本人でありながら英語を母国語とするような日英のバイリンガルが原点であったのかも知れない。その意味で片桐さんは自らがバイリンガルであることを原点にすることによって日本人や日本語を相対化し、世界の実践的な言語思想の観点から日本語や日本人の生き方を問うてきたのだと考えられる。英語が二十世紀・二十一世紀にこれほど世界に広まるには、英語教育の中に他の言語とは異なる有力な指導方法や動機づけがあったに違いない。片桐さんの次

に触れる著作類は二十世紀以降の英語教育の歴史を内側から明らかにして、その言語思想の背景を追体験させてくれる。

片桐さんの言語思想は、著書である『メディアとしてのベーシック・イングリッシュ』（京都修学社、一九九六年刊）や『ふたつの世界に生きる——般意味論』（京都修学社、二〇〇四年刊）などに記されている。「ベーシック・イングリッシュ」は、C・K・オグデンとI・A・リヤーズが『意味の意味』を共同で書いていく過程で発見したものであった。

片桐さんによると二人は、英語を外国人に効率よく学習させるために、英語を普遍言語である「コミュニケーションのメディア」と構想して、音が重なる使用単語も減らしたり、学習す

ることが思考の訓練になるようにした。「ベーシック・イングリッシュ」に基づいた英語教育法はのちにリチャーズにより、「Graded Direct Method」（GDM）として発展させられ、教師が初めに英語の文法を規則として教えるのではなく、また初めに耳と口の練習を数週間、数ヶ月間も徹底的にやらせるのではなく、各レッスンの最初は口で学習するが、同じ時間内に読むことや書くことまで持つていくという、「書くことを大切にする」学習法だという。その目的は学習者が「自然に何かを言いたくなるようにもっていくように工夫する」学習法だといわれている。そのためには、教師が初めに口頭で語り始める英語がシンプルで学習者が真似をしたくなるように、自らに応用しやすい英文を提示

することが出来るかが問題となってくる。英語でいつか対話をするためには、その前に独り言をたっぷりいう自発的な訓練が必要だと考えて、それを自覚的に実践させる方法なのだろう。片桐さんはオグデンとリチャーズの「ベーシック・イングリッシュ」がその後の後継者たちによつてどのような展開をしてきたかの歴史を記しているが、この学習法が逆に「権威ある英語教育の専門家たち」から排撃されてきた歴史でもあったことを浮き彫りにしてもいい。

また『ふたつの世界に生きる——般意味論』は、記号学の意味論ではなく、ひと言で言えば「言葉の嘘を発見する方法」とも言える。片桐さんはオルダス・ハクスリーの言葉を引用し「人間は言語と非言語の二つの世界にすむ両生

類だ」という。つまり現在使用されている言葉の意味の関係性や深層をあらゆる角度から検証する方法ともいえるだろう。最近の例で言えば、国や東電や学者たちが原発を「安全」と言う場合の「安全」とは、どんな意味で「安全」といつているのかを表情や立ち居振る舞いや言葉のニュアンスなどから明らかにする考えと言えるだろう。初めて片桐さんとお会いした時に感じたしなやかで心地よい人間関係への予感、実は片桐さんの言葉の思想から滲み出てきたから自然に思われたのだ。一般意味論を提唱したのはアルフレッド・コージブスキー（1879・1950）でその考え方は次の三点に集約されると片桐さんは言う。

明を創造していこうという実践的な試みを秘めている理論だったのだ。

2

私が『現代詩文庫32 片桐ユズル詩集』（一九七〇年刊、思潮社）を読んだのは、学生時代の一九七〇年代半ばだったと思われる。その詩集解説に関根弘が片桐さんについて興味深い紹介をしていたことが心に残っていたので、今回再読してみると次のような指摘をしていたことを思い出した。一九六〇年代後半に関根弘に会うために寝袋を入れたリュックサックを背負ってアメリカのビート詩人ゲリー・スナイダーがやってきた。その詩人を知るために片桐ユズル訳編『ビート詩集』や諏訪優の『ビー

1. 地図は現地ではない
2. 地図は現地のすべてをあらわすわけではない

3. 地図についての地図をつくることのできる

コージブスキーは第一次世界大戦を経験しながらも、人類は第二次世界大戦に向っていくことにひどく心を痛め、人間とは何かと深く問うていった。その結果としてヒトラーたちの「非生存的記号行動」を批判するために、大著『科学と正気』を書き上げて、人類の進化の道を一般意味論と名付けたという。その意味で単なる言語思想というよりも人間の文化や文明批判であり、その批判を通じて新たな人類の文化や文

ト・ジェネレーション』などを読んでスナイダーの理解を深めたという。ビート詩人が労働をしないで貰い物をしながら放浪の旅をし、詩を朗読しながら生きている詩人だと気付いたという。その頃の日本のビートの詩人の拠点が新宿の風月堂であり、また関西のフォーク・ゲリラが上京して新宿西口広場で土曜集会を開いていたが、その若者たちに影響を与えた黒幕的存在が実は、京都に在住している片桐ユズルではないかと関根弘は推測していた。実際にフォークに熱狂した当時の若者達の間で片桐さんの製作した「かわら版」カセットテープが広がっていたという。戦後詩は「荒地」や「列島」から始まって多くの詩人に影響を与えたというが、風俗にまで影響を与えたという観点からいうと、

片桐ユズルたちのアメリカのビート詩人の紹介やオーラル・カルチャー（口づたえ文化）の詩論である片桐ユズル「詩のコトバと日常のコトバ」などが戦後世代に大きな影響を与えていると次のように高く評価していた。

〈従来の日本の詩の専門家は、活字中心であった。片桐ユズルの詩の意識は、書くというより、しゃべるといふことの面白さにあ
る。かれは、「詩のコトバと日常のコトバ」のなかで書いている。「日常のハナシにおいて、コーンすれば早口になり、慎重になれば一語一語ゆっくり上げ足をとられないようにしゃべる、重要なことは知らず知らずくりかえす——これがリズムだ。」／詩集の題に

優れた詩人であり詩論家だったと思われる。片桐さんの指摘を日本の社会がもっと真剣に受け止めて「専門家」の専門語に思考停止されなかったら、3. 11以降の「専門家」不信にならずに済んだかも知れないなどと私は考えさせられた。片桐さんの詩論「詩のコトバと日常のコトバ」の主張の中で最も私が優れた見識だと考えるのは、詩人とは高度なメタファーを生み出す言葉の使い手であるというアリストテレス以来の考えを迷信であるというリチャーズの考えに共感し、今から五十年前に次のような意味を記述していることだ。メタファーは言葉の逸脱ではなく、メタファーがなければ言葉の伝達が不可能であるほど、日常語を話す民衆の間に満ちているのだという。そのメタファーの新鮮さ

もなっている「専門家は保守的だ」は、その問題意識の実践といえるだろう。「専門家」は、ホントは「専門家」であるが、「専門家」のほうがかっこいいということで、あえて「専門家」にしたというイキサツもいかにも片桐ユズルらしい。つまり片桐ユズルは、「専門家」はまちがっているということをいつているのである。〈

関根弘は、片桐さんの一般意味論で一番言い
たかった、「地図は現地ではない」という言葉
が嘘をつくことのためらいを語らない「専門
家」たちへの不信を的確に紹介している。その
意味で関根弘は「列島」の中心人物でありなが
ら、「列島」の限界を相対化することができる

に気付いて詩に導入するのが、詩人という存在
であると詩的言語や詩人の隠された本質を告げ
ていた。片桐さんの半世紀前のメタファーの迷
信を剥ぎ取った言語思想を言語派詩人たちが受
け止めていたら、現在の詩の世界は、もっと豊
かな民衆の知恵に満ちて、民衆に愛される詩的
世界を構築できたかも知れないと思われた。

新詩集『わたしたちが良い時をすぎている
と』には、一九六九年から二〇一一年までの約
七〇篇が収録されている。第一部「ばらっどひ
とつ、びらねる みつつ、そのためのみじかい
詩、1969・73」は一九七〇年代半ばに小
さな手作り詩集「かわら版」を発行していたが、
そこで書かれたものだ。その中に「コトバは
たねだ」という詩がある。

ことばは たねだ

四方八方に何千何百とまきちらして

芽がでない

かとおもうと

たつたひとつが

だれかさんの胸に根をおろし

どんな花がさく

この詩は、片桐さんの言語思想を体現しているような詩だ。人間は言葉以前のことを言葉で表現するのだから、何度も言い替えながら思いを伝えようとす。その口で伝える言葉は、自分の思いが込められた「たね」であり、その「たね」がいつの日か届けられた人の胸中に根を下

ろし、花が咲くことを願っている片桐さんの姿が見えるような詩だ。

第二部「ぬいぐるみの世界」は、主人公は動物たちだが、人間世界を動物たちを使いながら、その人間世界の窮屈さや宿命的なことを暗示している。片桐さんにとって動物の世界と人間の世界はつながっていて、人間が動物から学ばなければならぬことを感じさせてくれる。

第三部「むかしの歌」はイギリスやアイルランド民謡やイエイツなどの詩と楽譜とその解説も掲載している。一九六〇年代後半の関西フォーク・ゲリラの若者たちや一九七〇年代の京都「ほんやら洞」に集った詩人や芸術家達になぜオーラル・カルチャー（口づたえ文化）が支持されたかを知る貴重な訳詩群詩篇だ。

第四部「二つの世界」は、一九七〇年代の

アメリカの人びとやその人びとに関わる日本人などの言葉と言葉以前の「二つの世界」から、片桐さんの詩が立ち昇ってくる現場に遭遇できる。人間たち心の動きがシンプルに淡々と描かれていく詩群だ。

ているかが描かれている。

最後に詩集タイトルとなっている詩「わたしたちが良い時をすごしていると」を引用してこの小論を終えたい。

わたしたちが良い時をすごしていると

第五部「無心と経験の歌」は、「無心の歌」

と「経験の歌」に分かれていて、今回の詩集のためにオリジナルで書かれた四十篇以上の詩群だ。この「無心の歌」には、片桐さんのこれまで心がけてきたまっさらな無心の心で見つめてきた詩的精神の集大成の試みである。また「経験の歌」は、今まで語ることのなかった父母や祖母から託された「たね」がどのようなこだわりで、自分の経験となって今も生々しく息づい

わたしたちが良い時をすごしていると

あのひとが首をつきだして交差点を

わたってくるのが見えたので

わたしたちはかくれた

あのひとはひとの時間をぬすむから

と、いいながら気づいた

わたしたちに共有できるのは

時間だけだ

片桐さんの詩作の目的が「良い時」を共有することだと明快に告げている。また「あのひとが首をつきだして」という表現は、片桐さんが

現在日本の代表をつとめて世に広めている「アレクサンダー・テクニーク」の緊張を解く手法を暗示している。人間の頭は胴体に自然に乗り、周囲や上下をゆっくり見回す自然体であるから、あらゆる危機にも対応できるような構造になっているという考えを基本としている。他者の生きる自然な時間を尊重しながら共に生きることの喜びをこの短い詩で表現されている。このように自らの詩思想と言語思想と生き方がこれほど一致して若き日々から変わらず成し遂げてき

た詩人は、稀有だと私には感じられる。詩の魅力を「良き時」を過ごす生き方と結びつけて考え、詩を口承の伝統を生かす民衆の共有物だと思っている人びとには、ぜひ読んで欲しいと願っている。

片桐ユズル詩集

『わたしたちが良い時をすごしていると』葉解説文

鈴木比佐雄

コールサック社

2011